

第4 2回福島家庭裁判所委員会議事概要

第1 日時

令和6年11月14日（木）午後1時30分～午後3時30分

第2 場所

福島地方・家庭裁判所5階 第1会議室

第3 出席者

1 委員

大嶋洋志（委員長）、菅藤健一、園田稔、堤陽菜、長岐博、中村英康、三浦正博、山口裕（五十音順、敬称略）

2 説明者

山口事務局長、森田首席家庭裁判所調査官、赤間首席書記官

3 係員

赤津総務課長、征矢総務課広報係長

第4 開会等

新任委員の紹介

第5 前回委員会後の取組の報告について（説明者：赤津総務課長）

前回委員会のテーマ「家事調停手続におけるウェブ会議の利用について」に関して、令和6年2月に運用が開始されてから順調にウェブ会議による調停の実施割合が伸びていること、遠方に住んでいたりDV被害を受けている当事者以外にもウェブ調停の利用を働き掛け更なる活用を図っていること、前回委員会で説明したウェブ調停の方式を確実に実施しセキュリティ確保の面でも特段の問題が生じていないことを報告した。

第6 議事及び質疑応答の要旨

1 若手の活力を活かす方策について

(1) 説明：若手の活力を活かす方策についての説明（説明者：山口事務局長）

裁判所の各種取組の内容及びその取組を進める上で若手職員から意見を聞

く方策について説明した。

(2) 意見交換

別紙のとおり

3 次回（第43回）開催について

(1) 日時

令和7年6月23日（月）午後1時30分

(2) テーマ

追って定める。

第7 閉会

以 上

(別紙)

意見交換・質疑応答の要旨

(委員)

私の職場では、働き方改革を進めるにあたって、子育て世代でもある若手職員に意見を出し合ってもらい、それを組織で共有する取り組みをしている。

(委員)

私の職場では、若い人に意見を積極的に言ってもらう方法として、スクリーンに匿名で意見を映し出すことができるアプリを使用してみたいと考えている。若い人は、誰が言ったか特定されてしまうことを嫌う反面、注目されたい気持ちはあるようだ。

(委員)

私の職場では、新卒職員が参加する研修を行っているが、若手の同年代同士だと話し易いようで議論が活発になり意見が出やすい。同年代同士で話す機会を設けて絆を深めることによって、仕事で困ったときに互いに助け合うことに繋がったり、職場への帰属意識が高まったりすることにも繋がる。また、各自の業務の成果を発表してもらうことにより、自らの成長にも繋がっている。

(説明者)

裁判所でも、採用1年後の若手職員が参加する研修を行っており、各自の業務についての成果を発表してもらおうと共に意見を出してもらっている。若手職員の意見が重要であるという意識付けを行っている。

(委員)

私の職場は、若手が意見を言い易い環境だと思う。その理由は、上司や先輩が積極的に意見を言ったり、情報発信したりする姿を見せてくれているからだと思う。若手職員は未だ組織に染まり切っていないため、若手から業務に関して新鮮な意見をもらっている。

(委員)

意見が言い易いか否かは、心理的安全性が確保されているか否かに左右される。心理的安全性が確保されていると意見が言い易い。例えば、職場の序列がはっきり表れている状況だと意見を言いにくいので、円形テーブルを使用して職場の上下の序列が表われないような並びにして議論をすると意見が言い易いことも考えられるのではないか。

(委員)

必ずしも重要なことを言わなくてもよいので、ちょっと気付いたことや違和感でもよいので聞かせて欲しい、というアプローチが良いのではないか。

(委員)

ベテラン職員は、若手職員の提案に対して「できない。」と簡単に言う傾向がある。簡単に否定せずに、若手のアイデアを吸い上げて少しずつでも実践してみるのが良いのではないか。

(委員)

組織のトップが出すメッセージが重要であると考え。トップがチャレンジをしていくというメッセージを出すことにより、若手の部下もやり易く意欲が出易くなるのではないか。

(委員)

若手が意見を出してくれたことをリスペクトしなくてはいけない。それが必ず施策に結びつくことは少ないかもしれないが、若手の意見を周りの上司や先輩がメンターとなって支援し、施策に繋げていくのが良いのではないか。

(委員)

若手から出された意見を施策に結び付けるためには、すぐにできることから一つずつやっていき徐々に広げていくことが重要である。小さく生んで大きく育てるというアプローチをするべきである。周りがサポートしながら徐々に大きくして施策に結びつけるのが良い。

(委員)

私の所属する組織は構成員が高齢化しているので、若手にどう参加してもらいか困っている。その点、小さい子供をターゲットにした企画をすると、その親も参加してくれるので効果的だ。

また、今の若い人は多様化しており、集団から個人へと向かっている。個人の趣味趣向に合わせるアプローチが良いのかもしれない。

(委員)

自分たちが若手だった頃と比べて、今の若手はワーク・ライフのうちライフにも重きを置いているという時代だと思う。若い人の考えに寄り添っていくアプローチをし、コミュニケーションをとって行く中で、若い人に組織の成長に目を向けてもらうことも考えられるのではないか。

以 上